

破ガン一笑

笑いはガンの予防薬

南 けんじ 漫談家

主婦の友社

破ガシ

江苏工业学院图书馆

笑しはガシの予言

南に蔵し 漫談家 書章

〔著者紹介〕 南 けんじ (みなみ けんじ)

- 大正13年 東京・世田谷生まれ。
高等小学校卒業後、東京計器に入社。
- 昭和16年 入社半年後、芸人願望の虫がおさまらず、神奈川県
の慰問隊に入る。この間、数々の芸を見よう見まね
で、一通り習得。
- 昭和20年 会社を正式に退社して芸人志願。エノケン劇団に入
ろうとするが、狭き門とあきらめ、慰問隊時代に蓄
えた金を元手に劇団を結成。「青春座」と称して各劇
場を回ったが、1年後に貯金を使い果たし、すっか
らかんになって解散。
- 昭和22年 スイング・ボーイズを結成し、浅草・花月劇場から
芸人として正式にデビュー。
- 昭和36年 歌謡漫才に転向。
- 昭和39年 NHK漫才コンクールに入賞。
- 昭和49年 漫談家に転向。このころ、ビートたけしが浅草松竹
演芸場に現われた。
- 昭和60年 芸能生活40周年を記念して興行を開催。
現在は通院中だが、仕事があれば寄席に出て、ガン
をネタに観客を爆笑させている。

破ガン一笑 笑いはガンの予防薬

平成九年 一月十日 第一刷発行

著者 南けんじ (検印省略)

発行者 石川康彦

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九 郵便番号

電話 (編集) 三三二五二八二二 三三二五二八二二

(営業) 三三二五二八二二 三三二五二八二二

印刷所 図書印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。
お近くの書店か、本社へお申してください。

破ガン一笑

笑いはガンの予防薬

装丁・装画 倉橋三郎

破ガン一笑◆目次

舌代	4
第一章 ガン発見	7
第二章 家族の胸の内	49
第三章 入院生活もまた楽し	69
第四章 仲間と客はこわさ半分、興味半分	139
第五章 人間が死ぬということ	161
第六章 笑いはガンを予防する(対談・伊丹仁朗医師vs南けんじ)	185

舌^{ぜつ}代^{だい}

私の初舞台は戦後じきですから、芸人生活はもう五十年を超えました。その間に、ボーイズ、歌謡漫才、一人しゃべりの漫談と、芸のスタイルは変わっています。

だけど、自分で言うのもなんですが、私の身過ぎ、世過ぎはずうつと変わらず、おもしろおかしく生きてきました。今の芸人じゃとてもじゃないが、こんな生き方をするのは無理でしょう。時代に恵まれていたんだと思う。私みたいに売れない芸人には、こういうふうな生き方ができただけでも幸せです。いえ、負け惜しみじゃありません。心底そう思っているのです。

大半は今ほど演芸がテレビを中心に回っていない時代でしたから、明日の銭がなくても、なにかと仕事が入ってきて、食いつないでこれたのです。かみさんにも逃げられず、いまだに続いています。ほんと、冗談じゃなく、かみさんに逃げられた芸人って多いんですよ。とにかく、明日は明日の風が吹く、と気ままに生きてもなんとかありました。振り返ってみると、斜陽といわれる映画界と肩を並べるように、私たち芸人の世界も生きにくいご時世となりました。

といつても、今さら昔のことをあれこれ話してあのころを懐かしもうという気は毛頭ありません。今の身辺の話しかしいつもりです。それが漫談家の私の信条です。芸歴には遠く及びませんが、五年ほど前からガンとのおつきあいが始まりました。初めは大腸ガン、二年前から肺ガンと仲よく一緒に舞台に立っています。

たいがいの方は、ガンと言われると、死病と恐れたり、生きる氣力を失うかもしれませんが、私は、なったものはしょうがないじゃないか、それならこの先どう楽しく生きようか、というふうにしか考えません。ガンで死ぬのも寿命のうちです。こればかりは生きとし生けるもの、だれも逆らえない。そう思うから、ガンを特別扱いしません。

こんなことをいうと、達観しているとか悟っているんじゃないかと、私を過大評価するかもしれませんが、とんでもない。私は解脱げだつはもとより悟りを開くなんて、これっぽっちも縁のない人間です。ただ、なるようにしかならないという楽天家で、毎日をどう楽しく過ごそうか、それつきり頭にない生き方をしてただけなんです。

ですから、これからお話しする内容は、よくある芸人の涙の闘病記ではありません。ガンといかに楽しく暮らしているか、漫談家、南けんじの小ばなしとしてお読みください。なにしろ、好きで芸人になったんですから、最後まで笑って生きてみせます。

構成・取材 光森忠勝

第
一
章

ガ
ン
発
見

その年は、芸術祭に参加した年だから、平成三年だね。そのころからときどき腹が痛むようになったんです。そんなにがまんできないほどじゃないんで、病院へ行くまでもないと思ってた。で、しばらくたつと痛みが止まるけど、また十日間ぐらいたって痛み始めるんです。そんな状態が十月あたりから月に二、三回ずつ、暮れまで続いたおかげで、芸術祭は例の「反省猿」に負けちゃってね、賞をとりそこなってしまった。

翌年の正月に、名古屋の大須演芸場へ十日間出るつもりで行った。着いた日に一回ステージに上がったら、すごい差し込みがきたんですよ。こたつに入ってあたたまっていても、あぶら汗が流れてきて七転八倒するほど苦しかった。下痢でトイレへ七、八回行ったんです。この劇場のトイレは洋式トイレじゃないんだ。ひもを引っ張って流す旧式のやつだから、ひょいと下を見たら、血便が出てたんです。

余談ですけど、ひもをグツと引っ張ると、どのくらいの水が流れ出るか知っていますか。六リットル出るんです。一・八リットルが一升だから、三升以上の水が流れる勘定になります。

あくる日も血がまじってる。これは普通じゃないなと思った。女は別にして、男の体から血が出るって、よくよくのことだからね。それで、こんなさびれた小屋で死にたくないと思つて、三日目に仕事を切り上げて東京に帰つてきちゃつた。

昔、胃カイヨウでいっぱい血を吐いたことがあるから、また胃カイヨウじゃないかと、とりあえず近所の病院へ行つて調べてもらつたんです。

まず、バリウムを飲んだ。でっかい入れ物に入れてさ、全部残さないで飲んでください、飲んでくださいって言うけど、あんな甘つたるいもの飲めたもんじゃない。酒ならグツと飲んじやうけど。のどに麻酔かけてるけど、胃カメラは飲みにくいね。医者は、

「うん、ちよつと荒れているだけ」

これでおしまいだ。胃のほうは大丈夫。肺のレントゲンも撮つた。これも大丈夫。肝臓も調べたけれど、これも別に異常なし。

「ついでだから、大腸のほうを調べますから、前の日から何も飲まず食わずで来てください」

と言われて、あくる日、病院へ行った。

上から飲んだバリウムを今度は尻から入れるんだね。知らなかったよ。浣腸ならビュツと入れて終わりでしょう。それをでっかい注射器でね、ゆっくりゆっくり入れるんだよ。思わず出そうになるのを「がまんしてください」って言うけど、そりゃ、そうだよ、ね、がまんしきれずに「ウツ」ってやってごらん、テキは真っ白になっちゃうからね。でも、つらいぜ、がまんするのは。

次に尻からカメラを入れるって言うんだよ。で、あんなもの尻から入れるもんじゃない、と言ったの。そんな話をしているうちに、スルツと入っちゃった。さぞかし痛いだろうと思ってたけれど、かえっていい気持ちだったもん。そのとき、オカマの気持ちがわかったね。

看護婦が、

「腸に空気を入れます。おなかがパンパンになるから、痛かったら痛いって言ってください」

言うとおりで。

「いてエ、ててエー」

そのとき、思ったね。ああ、子供のころ、学校の帰りにカエルをつかまえて尻から空気を入れ、腹をパンパンにして、川にボンと捨てたら、プカプカ浮いて流れていったなあ、って。あんなことするんじゃないかった。「報いはカエル」って、これからきたんだな、と思ったもん。

レントゲン撮影が終わった。

「じゃ、もういいです。トイレで出てきてください。それで、どうなったか見てきてください」

そしたら、やつぱり血がまじっている。看護婦が聞くんだった。

「どうでしたか？」

「よかったです。私のお尻が処女だっていうのがわかりましたから」
ナースセンターの連中が大笑いだ。

大腸は太いんだね。それで長さは自分の身長のお五倍あるんだって。だけど、空気を入れて、バリウムを散らしているから、真っ白できれいなもんだ。

医者、そのレントゲン写真を見て、大腸と小腸の境にね、コップの縁取りみたいに、縦に二、三ミリぐらいの線がある、って指さすんだ。

「これが、いやらしいですね」

普通はガンというと、ポリープとかなんとかいつてかたまりみたいなものができるんだけど、私の場合は違ってた。

「ガンの疑いがあります」

「で、ガンの確率は？」

「五分五分です」

「五分五分じゃ、ガンじゃねえか」

「そりゃ、そうだけど、どうしましょう」

「どうしましょうといったって、ガンだったら切らなきゃ、しょうがないじゃないか」

「じゃ、うちは小さいから、設備が整っている大きな病院を紹介しましょう」

その医者に紹介状を書いてもらって、東京・築地にある国立がんセンターへ行っただけ

す。

レントゲン写真持って、がんセンターへ行ったら、担当の先生がパツと見るなり、すぐに、

「切りましょう」

って簡単に言うんだよ。

「三週間たったらベッドが一つあきます。通知が行ったら、翌日に入院してください。帰るときに入院手続きをしていってくださいね」

私の経験からいうと、ガンは必ず体に知らせがあります。たとえば三、四日便が出なくて、やっと出たときに血がまじっていたら、これは痔じゃないかなんて自己診断しないで、すぐ検査したほうがいいですよ。痰に血がまじったときも同じです。手おくれにならないように、早め、早めに検査する。早期発見すれば、ガンもけっしてこわくありません。

入院したのは、忘れもしない平成四年三月五日。前日の四日にちょうど浅草の五六五六

会館に出ていたら、楽屋にうちから電話があつた。うちのかみさんは、私が当分家に帰らなくても電話なんかしてさがしたりしないから、うちから電話って言われると、ドキツとするんだ。

「なんだ？」

と言ったら、

「がんセンターから通知があつたわよ。やっぱりガンなんだね」

「ああ、そうだよ。がんセンターに入院するんだから、ガンに決まっている」

私なんか、もうなつちやつたもんはしかたがないと覚悟していたから、かみさんの電話を聞いてもどうつてことなかった。

うちのかみさんが寝巻きなんか持って、二人して五日の昼前にがんセンターへ行つた。魚河岸が近いせいだろうね、病院の夕食に、まぐろの中トロのいいところが出たんだ。それを食べて、こんなうめえもの食わせるなら当分退院しねえって言つたんだよ。そして、あくる日から絶食、点滴だけだ。だから、あのまぐろは、死刑の前の日の食事みたいなもんですよ。